

弘前大学教職大学院 News Letter

第 9 号

2020.2.6



弘前大学教職大学院の文化

それは「人と人との関わりを大切にした、深い学び」



本学教職大学院は、平成29年4月の開設から3年の月日が経とうとしております。

私は、開設年度の最初のガイダンスで、専任教員と第1期生の皆さんに「皆さんの力で、この弘前大学教育学部に新しい教職大学院の文化を築いていただきたい」と話をしました。教職大学院の文化の創造は現在進行形ですが、今、そのあり様を私なりに言葉にすると、「人と人との関わりを大切にした、深い学び」に落ち着くと考えます。何か当たり前のことのような言葉ですが、その実現は、現代社会のみならず教育界においてもなかなか難しい環境になってきていると感じます。本学教職大

学院の特徴は、小・中・高・特別支援学校の現職教員院生と学部卒院生とが大部屋研究室で共に生活しながら、全て演習・実習で組まれた授業を教員と一体化して展開するところにあります。多様な教育者たちによる深い学びです。

さて、この先、30年間くらいの間に社会構造が大きく変化すると考えられており、その変化に多大な影響を及ぼす要因として、AI技術の進化が挙げられています。この大きなうねりの中で、今後の社会形成の立役者となるのは子どもたちです。AI技術の進化により「人間の本質が問われる」今日、子どもたちには、人との関係を大切にし、それぞれのもつ知識・教養やスキルを活かし、本気で人間関係にコミットすることのできる大人になってほしい。それには、教育現場の教員の学び自体が、人と人との関わりを通じた深い学びであってほしいものです。

教職大学院が、こんな願いをかなえてくれる教育文化の発信源として、さらに新たな文化の創生にチャレンジしていくことを期待します。

研究科長 戸 塚 学

新しく生まれ変わる教職大学院（第3期入試は3月8日）

これまで、教育実践開発コースとミドルリーダー養成コースの2コースであった教職大学院が、令和2年度より、学部卒院生に対する、「学校教育実践コース」、「教科領域実践コース」、「特別支援教育実践コース」の3つのコースと、現職教員院生に対する「ミドルリーダー養成コース」の、全4コースとなり、教職大学院が新しく生まれ変わります。

第3期入試が3月8日（日）に実施されます。出願期間は2月10日（月）～2月17日（月）となっております。受験を希望される方は、入試情報の詳細がホームページに載っておりますので、そちらをご覧ください。

教育実践研究発表会を2月14日（金）に開催

一年次院生の年次報告会、二年次院生の最終報告会が2月14日（金）10：00から青森県総合学校教育センターで開催されます。院生は今、自分の研究の最後の追い込みに精一杯努力しています。この努力はきっと大きな実となり、花を咲かせるものと確信しております。

この院生の頑張りを皆様もぜひご覧いただければ幸いです。事前申込みの受付は既に終了いたしました。当日受付もしております。ぜひお越しいただき、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

1年次院生からのメッセージ 年次報告会に向けて

M1 教育実践開発コース 一戸 萌里



研究テーマ
中学校国語科における「言葉による見方・考え方」を働かせる単元学習の追究

私は、「言葉による見方・考え方」を働かせる単元学習について研究しています。これまでの先行研究を基に、教材において、国語科の目標に掲げられている「見方・考え方」の具体化を図り、実践を行いました。また、生徒が課題意識をもちながら学習できるよう、学びにつながりをもつことができる指導を進めたことで、主体的に取り組む姿を見ることができました。

実践や研究を進めるにあたっては、実習校の先生方やゼミの先生には綿密な御指導をいただき、ありがとうございました。報告会当日は、本研究の成果を精一杯述べさせていただきたいと思っております。

M1 教育実践開発コース 金田 宏樹



研究テーマ
高等学校における地理的な見方・考え方を働かせる地理教育 - GIS教材の活用を通して -

私の研究は、「地理的な見方・考え方」を働かせる高等学校の地理教育を目指して、GIS（地理情報システム）を活用した授業づくりとその効果検証を目的としています。現代のように地域間の交流の盛んな時代においては、社会的事象を位置や空間的な広がりなどを考慮して地図上で捉えることは大切です。そこで今回は、WebGISに位置づけられる「地理院地図」の機能を活用した教材研究とその効果の検証を行いました。今後は、多様なオープンデータやGISの活用まで、段階を追って取り組みたいと思っています。

M1 教育実践開発コース 古川 弘基



研究テーマ
伝え合う力を高める教科横断的な学習指導 - 言語活動の充実を通して -

私は「伝え合う力を高める教科横断的な学習指

導」というテーマで授業実践を行いました。副題「言語活動の充実を通して」とあるように、伝え合う力を高める手立てとして、言語活動の充実が欠かせないと考えます。今年度は実習校にて国語の単元指導を行わせていただき、話し合う言語活動を中心に、アンケートや話し合いの記録を用いながら、学級の児童の実態把握と学習の取組状況を見ました。伝え合う力は、国語科の教科目標にあります。それがどのようなものか定義することに長らく悩みました。今年度学んできた、授業に関する課題を整理しながら、来年度の展開への見通しまで、お伝えしたいと思います。

M1 教育実践開発コース 佐藤 皓一



研究テーマ
高等学校「現代社会」における公民的資質の向上 - 地域課題の分析と発表を通して -

私は、高校「現代社会」における公民的資質の向上というテーマで報告書を書きました。この報告書では、公民的資質という言葉が多く出てきます。これは簡潔に言うと、現代の社会について探究しようとする意欲や態度、社会についての広く深い理解力と自主的な精神、人間としての在り方生き方についての自覚、自己の人格の完成に向かおうとする実践的意欲になります。これらを、どう向上させていくのかについて調査、考察を行いました。そして、公民的資質の向上を図るため、授業内容を工夫していきたいと考えています。

M1 教育実践開発コース 須藤 大貴



研究テーマ
児童が主体的に取り組む小学校音楽科の授業づくり - 表現及び鑑賞の領域を関連させた授業を通して -

本研究では、児童が自ら目的意識を持って音楽活動に取り組んでいく主体性をどのように育てていくことができるかを、授業実践やその分析等を通して考察しました。授業実践では4つの手立てを用いて、曲を鑑賞させ、グループごとに歌う際の工夫についてワークシートに書かせ、発表する活動を行いました。

成果としては、教材や学習形態の工夫、各領域を関連させた授業を展開することで、児童の主体的な姿を促すことができました。一方で、課題も

いくつかあり、その一つとして、児童の意欲の差が挙げられます。積極的でない児童に対し、主体的な姿へと、導くことが今後の課題であり、指導計画を含めた更なる改善に取り組んでいきたいと考えています。

M1 教育実践開発コース 蛸嶋 亮介



研究テーマ
生徒の語彙能力を高める英語授業の在り方 —音声指導に注目した学習活動を通して—

初歩的な英語学習者には、単語を母語の音韻体系にあてはめ、例えば "Baseball" を「バセバル」などとし、日本語に寄せることで学習を容易にしようとする安易なテクニックがしばしば見られます。このようなスペルと音韻の本来の関係に対応させていないテストテクニックとしての記憶法は、語が持つ音と文字を長期にわたって関連させることを阻害する可能性があると考えます。誤った発音は誤った意味を伝え、言語使用場面において意思疎通を図ることができなかつたり、誤解を招いたりする可能性もあるため、発音指導はより重視されなければなりません。そこで本研究では正しい音韻指導を狙った様々な語彙学習活動が及ぼす効果を、生徒の語彙学習スタイルごとに検証することを試みることにしました。

M1 教育実践開発コース 谷 垣 花



研究テーマ
保健室前廊下の掲示物を活用した保健指導のあり方について —生徒のヘルスリテラシー向上を目指した養護実践—

年次報告会では、本テーマのもと、生徒の健康に対する興味・関心を喚起するために必要な掲示物の要素について報告をします。今年度、私は実習校の保健室で活動をさせていただくと同時に、保健室前の廊下に掲示する掲示物を作成する機会をいただきました。当初は、指導のねらいが漠然としたまま作成してしまうことがありました。しかし、掲示物を作成する経験を重ね、生徒を観察することで、掲示物を通して効果的に指導を行うための手掛かりを得ることができました。次年度は、今年度の実践や観察、実態調査等の結果を踏まえ、効果的な掲示物の要素について検討すると共に、掲示物を活用し

た保健指導が生徒にどのような影響を与えるのかを考察したいと思います。

M1 教育実践開発コース 成田 伊織



研究テーマ
生徒一人ひとりが主体的に取り組むための授業のあり方
—協働学習を通して—

平成30年7月に告示された「高等学校学習指導要領理科編の中では『主体的な学び』、『対話的な学び』、『深い学び』の3つの視点から学習過程を更に質的に改善していくことが必要である。」と指摘し、アクティブラーニングの視点での授業改善が必要であるとしています。さらに、河合塾ガイドライン(2015)によると高校の教師へのアンケートの中で、生徒の学習に対する主体性の課題を挙げた割合が高く、主体的な学びを実現するための指導の変化が必要であることを指摘しています。よって、私は生徒一人一人が主体的に取り組む授業の在り方についての研究に取り組むこととしました。

M1 教育実践開発コース 藤澤 麻衣子



研究テーマ
保健室における救急処置時の保健指導のあり方について
—問診票の活用を通じた生徒自身の問題の気づき、自己洞察、自己決定の促進—

本研究では、生徒が自身の健康課題を解決する過程を経験するための保健指導の手立てを検討します。現在直面していたり、これから直面したりする健康課題を生徒が自力解決することができるような力を育みたいという願いからです。今回は、自身の対応記録から抽出した①生徒の良さと課題点、②自身の対応の良さと課題点、③「①と②」から今後の実践内容について考察したことを報告致します。テーマの原点は、実習校での疑問やつまづきにありました。執筆にあたり、自身の実習をじっくりと振り返る中で、それらの課題について見えてくるものが多くありました。実習校の生徒の皆さんや先生方から頂いた学びを形にできるよう、今後も頑張りたいと思います。

M1 教育実践開発コース

山田 啓明



研究テーマ
「考えの形成」を豊かに
する国語科学習指導
—内言を外言化する言語
活動を通して—

私は『「考えの形成」を豊かにする国語科学習指導—内言を外言化する言語活動を通して—』というテーマを考えています。教師の問いに対して生徒が「なんとなく」という答えをしている様子から、この「なんとなく」を言葉にする手助けをしたいと考えるようになりました。そこで「考えの形成」をキーワードにしながら研究を進めてきました。「なんとなく」でもいいので、自分の考えを音声や文字で表出する過程を繰り返すことによって、考えが確かなものになっていくのではないかと考えています。「考え」について考えることは難しいことですが、ゼミの先生や仲間、実習校の先生方からの励ましのおかげで頑張ることができています。報告会当日も精一杯やりきります。

M1 教育実践開発コース

米田 雄人



研究テーマ
児童がお互いの考えを
共有し、多様性を認め
合う道徳科の授業づく
り

道徳教育及び道徳科では、道徳性を養うことを目標としています。その実現のためには、児童が多様な価値観に接することが大切であり、対話や協働を通して、物事を多面的・多角的に考えることが求められています。しかし、その対話や協働には不安定さが内包されながら、前提として、児童同士が「認め合える関係」、すなわち「対話的關係」の必要性が指摘されています。本研究では、その「対話的關係」の構築について、小学校第4学年を対象とした道徳科の授業実践を通して追究していきます。

M1 ミドルリーダー養成コース 葛西 昌平



研究テーマ
生徒会活動を通じた学
校組織の活性化はどう
あるべきか —形成期
教員に対する生徒会指
導力の育成を通して—

大学院では、教科指導や学級経営など目の前にある仕事をまず解決するというこれまでの日々から離れ、大きな視点から学校教育を捉える機会になりました。大学院の授業における院生相互の意見交流や、事例の検討を通して、さまざまな教育活動が効果を発揮し合うことによって、学校がより活性化していくということを再確認することができました。「生徒会活動」を中心にテーマを設定していますが、多岐にわたる学校の教育活動において、生徒会活動は学校組織の活性化のためにどのような役割を果たしているのか、これまでの大学院での学びをもとに、勤務校における2年目の実習に取り組み、考察を深めていきたいと考えています。

M1 ミドルリーダー養成コース 木村 千穂



研究テーマ
小学校で学んだ英語表現
を生かした中学校の授業
づくり —A中学校区に
おける小中学生の実態調
査を踏まえて—

小中の英語学習の円滑な移行に向けて、子どもの視点で小中の学びがつながるような授業づくりを目指したいと思い、本テーマを設定しました。勤務校の中学校区にある小学校にも協力していただき、授業観察やアンケート調査等で子どもの学びの実態を把握しながら研究を進めています。今後、小6から中1へと学習を進める過程で、子どもの1年間の変容を見取っていく予定です。たくさんの方の理解と協力のおかげで研究が成り立っていることを実感しており、感謝の気持ちでいっぱいです。来年度は、この1年間教職大学院で学んだ「協働的に取り組む視点」「全体を俯瞰的に捉える視点」を大切に、子どもたちに自身の学びが還元できるように努めていきたいと思っています。

M1 ミドルリーダー養成コース 工藤 清和



研究テーマ
特別支援学校（知的障
害）における普通科と専
門学科を併設した高等部
の教育課程の在り方に
関する研究 —教科等横
断的な視点によるカリ
キュ

ラム・マネジメントの実践を通して—

私の勤務校は、全国でも数少ない普通科と産業科を併設する知的障害のある生徒を対象とした高等部単独の特別支援学校です。本研究では、普通科

と専門学科を併設する特別支援学校（知的障害）高等部におけるカリキュラム・マネジメントの現状と課題を把握するとともに、教科等横断的な視点による各教科等の単元及び授業の改善を図るための効果的な手立てを検討することを目的としています。

今年度は、文献研究及び実地訪問調査により、カリキュラム・マネジメントの組織的・計画的な取組のためのツールや先進校の実践研究の資料を収集しました。また、本校教員へのインタビュー調査により、教員が共通して感じている主な学校課題を明らかにしました。次年度は、他校からいただいた資料や質問紙調査の集計と分析を進め、他校の現状と課題、対応方策を明らかにするとともに、勤務校におけるカリキュラム・マネジメントの実践研究を進めていきたいと考えています。

M1ミドルリーダー養成コース 野呂和也



研究テーマ
数学科組織としての授業改善をめざした研修体制の一考察 —生徒に考えさせる授業づくりを通して—

教職大学院で学んだ理論と現場での実践を往還させ、これまでの教師としての自分を反省的に振り返ると、授業改善の視点が今までの自分に足りなかったことに気づかされました。その視点に立ったとき、生徒に考えさせる授業とは何か、教師の授業態度はどうあるべきか、生徒の思考を見取るとはどういうことかなど、次々と疑問が押し寄せてきます。そして、それらの疑問に対する答えを探し学んでいく中で、自分の「かたくな」な部分を見直し「しなやか」な発想や対応を必要に応じて取り入れ、教師スタイルを再編成する必要性を強く感じるようになりました。自校の先生方と共に学び合えるような、よりよい授業改善を目指して実践研究を進めたいと考えています。

M1ミドルリーダー養成コース 花田美衣



研究テーマ
中学校における通常の学級と通級指導教室の連携の在り方

通級による指導を受ける子どもの数は全国的に増加しており、青森県の中学校では9校が通級指導教室を設置しています。勤務校では、通級指導教室が設置されて

から今年度で4年目となりました。勤務校の先生方にインタビューやアンケートの協力を得ることができたことで、通級指導教室のこれまでの成果と課題を把握することができました。子どもたちにとって、通級指導教室での学びが「わかった！できた！」と実感できるように、校内の先生方と協力して研究を進めていきたいと思っています。

M1ミドルリーダー養成コース 原田正樹



研究テーマ
小規模校における教員相互の指導力向上を目指した取組 —低中高ブロック体制での教員連携を通して—

若手の教員がたくさん採用され、現場も若返り、教育が活性化してきています。しかし、働き方改革が叫ばれてはいるものの、教員の多忙化は改善に向かっているように感じられません。また、少子化の影響で県内小学校の半分以上が小規模校（11学級以下）であることから、若手教員は日々の教育に対する疑問や不安をどれだけ先輩の教員に相談できるのか疑問に思います。学年団を組めない小規模校でも、ブロックを単位とした様々な連携をすることで、学年団のような助け合えるシステムがあれば多忙感も孤独感も軽減されるのではないのでしょうか。次年度は、勤務校の先生方と一つになって、表題の研究に臨もうと思っています。

M1ミドルリーダー養成コース 平田貴和



研究テーマ
ベース校におけるALTとの異文化理解を基にしたチームティーチング

ALTとのチームティーチングは、小学校での英語活動の増加などに伴い、国際理解の面においても今後より一層、重要な活動になるだろうと予想されます。ALTとJTE（日本人教員）間の信頼関係に基づく円滑なコミュニケーションが、より良い協働のために必要となります。ALTとJTEがお互いの文化や考え方を理解し、尊重することが、チームティーチングの改善と、ベース校におけるALTの業務の活性化につながると考えます。ALTとJTEへのインタビューなどから浮かび上がったキーワードをつなぎ、理想的なチームティーチングの在り方について考えてみたいと思っています。

M1 ミドルリーダー養成コース 宮本 小百合



研究テーマ
学級担任だからできる
外国語活動・外国語科
の授業づくり
—小中連携を生かした英語
教育の充実に向けて—

大学院入学当初は、小学校の外国語活動の研究がしたいという漠然とした考えしかありませんでした。けれども前期の授業で理論を学び、実習、省察を繰り返すうちに研究テーマが明確になりました。そのテーマとは、学級担任に着目した外国語の授業づくりです。これまで積み上げてきた本校の校内研究の成果と課題を生かし、小学校教員が感じている不安や英語の授業に対する苦手意識を少しでも和らげ、学級担任だからできる授業づくりをしたいと思いました。その方法の一つとして、学区内中学校との連携を考えています。今回の研究が、たくさんの先生方のご理解とご協力により進められていることに感謝し、研究していきたいと思ひます。

2年次院生からのメッセージ 最終報告会に向けて

M2 教育実践開発コース 浦田 夏輝



研究テーマ
生徒の主体性を育てる中
学校数学科の授業づくり
—課題意識に着目した活
動を通して—

本研究では、生徒の主体性を育てるために、課題意識をもてるようにすることが重要であると考え、その手立てとして「予想させる活動」を取り入れた授業実践を行いました。授業中の生徒の様子やワークシートなどから、主体的な姿が見られたかどうかを考察したものを報告書にまとめています。

これまで教職大学院で培ってきた学びを形にできるように、最終報告会に向けて準備していきたいと思ひます。

M2 教育実践開発コース 久保田 遥



研究テーマ
資質・能力の育成を指
す小学校国語科「読む
こと」の授業づくり
—パフォーマンス課題を
取り入れた単元学習を通
して—

私は、小学校国語科「読むこと」において、どのような授業づくりをすれば、児童の資質・能力を育成することができるかということに課題意識をもち、「パフォーマンス課題」を単元学習に取り入れて実践研究を行ってきました。

報告会では、2年次後期に行った授業実践について、1年次からの研究の経緯を踏まえて、児童が課題に取り組む中でどのような資質・能力を身に付けることができたかという成果と、実践から見いだされた課題について考察したことを発表します。

本研究を進めるにあたって、実習校の先生方には、多くの授業実践の機会をいただきました。先生方への感謝の気持ちを忘れずに、2年間の研究の成果を報告したいと思います。

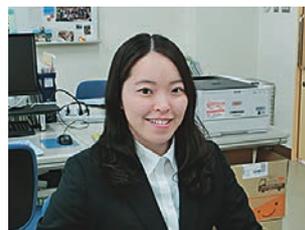
M2 教育実践開発コース 中野 悠



研究テーマ
高等学校における歴史
的思考力を深める日本
史学習 —地域教材の
活用を通して—

高校における歴史科目の課題として、教える知識量の多さから、生徒が用語を暗記することに終始してしまう傾向があります。それ故に、生徒の思考力を深めることが課題に挙げられています。この課題から、生徒が歴史を複数の視点で捉えることができるような、思考力の育成を主とした授業を行ってきました。2年次の授業実践では、生徒の思考力を深めるために、地域教材を活用してきました。最終報告会では、地域教材を通して生徒がどのように変容したかをアンケートや記述から考察し、授業実践の成果や課題を報告したいと思います。忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

M2 教育実践開発コース 山田 なつみ



研究テーマ
人間関係形成能力を育
む教科関連の学び
—交流活動を通して—

本研究では、教科横断的な単元構成や交流活動を通して、児童の人間関係形成能力を育むことを目指して実践してきました。その中で、児童の様子や記述等から人間関係形成能力が育まれていることが分かったため、その成果や課題を報告します。

2年間を通して、実習校の先生方には多くの授業実践の機会や実践に対するご助言を頂き、大変お

世話になりました。その実践から得た学びを生かし、最終報告したいと思います。また、来年度勤務する学校現場でも生かしていきたいと思っています。

M2 教育実践開発コース 横田 強



研究テーマ
数学における主体性の育成
についての一考察 –生徒
の活動の場を活かして–

私の研究は数学における主体性を授業の中でどう高めていくのかという指導法についてです。主体的な姿は、授業の中で課題に向けて生徒自身が考えるよう教師の工夫が必要だと考えています。そのためにも生徒たちが授業の中で活躍し、自ら学びの実感をもつことで、それらが達成できると考えています。報告会ではそのための工夫や、授業実践を通して発見できた生徒たちの学びの姿等をお伝えしていきます。成果や課題を踏まえながら、生徒たちの主体性をどうやって高めていくかについて発表したいと考えています。

M2 ミドルリーダー養成コース 稲葉 友輝



研究テーマ
不登校児童に対する組織的
支援の在り方に関する研究

不登校児童に対する組織的支援の在り方について、コーディネーター役の教員を組織の中に位置付けることによって、チームによる支援を推進する体制を整備し、不登校児童個々の状況に応じた組織的支援の在り方を探ることを目的として研究を進めてきました。校長先生を始め、同僚の先生方からご理解とご協力をいただきながら、学校全体がチームで対応できるように、今年度は、不登校対応コーディネーターという立場から、学校課題と向き合ってきました。報告会では、組織的に不登校対応を進める体制づくりや職員の動き、取組について、その成果や実践上の課題を報告したいと考えています。

M2 ミドルリーダー養成コース 工藤 由紀



研究テーマ
不登校の早期発見・早期
対応と未然防止に向けた
取組について –生活ア
ンケートの活用とレジリ
エンス向上プログラムの
実践を通して–

これまでの自身の経験から、教育課題である不登校問題への取組について考えたいという思いを抱いて教職大学院へ入学しました。

この2年間、授業や実習等を通して、研究の方向性が多少変わりはしましたが、不登校問題に対して何ができるのか、その取組について考えたいという思いは、自分の中で変わることはありませんでした。そこには、私なりの思いがありますが、紙面の関係上、ここでは伝えきれません。

報告会では、そのような私の思いを含めつつ、今年度、勤務校の先生方にご協力いただきながら、早期発見、早期対応と未然防止という視点で取り組んできた実践をご報告いたします。

M2 ミドルリーダー養成コース 下村 亘



研究テーマ
同僚との対話で作り上げ
る校内研修の在り方
–コンピテンシー・ベー
スの授業づくりを目指し
て–

新学習指導要領への完全移行に伴い、現場では「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点に立った資質・能力（コンピテンシー）の育成が求められています。その実現に向けて中核を担うのが校内研修であり、教員自身が「主体的・対話的で深い学び」を実践する必要があると考えました。研究では子どもの学びの過程を見取ることを手掛かりに、同僚との対話によって協働的に作り上げていく校内研修の在り方を追究しました。たくさんのご理解・ご協力をいただいた本校の先生方に感謝しながら、今後も協働する風土の醸成に少しでも力になれるよう努めてまいります。

M2 ミドルリーダー養成コース 下山 達彦



研究テーマ
高等学校における教科
横断型授業改善につい
て –学年主任としての
取り組みとその考察–

立派な幹、茂った枝葉、たわわな果実。そして、それを支える根。どう関われば彼らの根を、より地中深く、より広範囲に張り巡らすことができるのだろうか。見えないものを育てることの難しさ。私たち教員の苦悩がそこにあります。しかし、喜びもそこにはある。教科横断型授業改善は見えない根を育てるための有効な手立ての一つであると

信じ試行錯誤してきました。2年間の成果はごくごく小さなものですが、どなたかのお役に立てたとしたら幸いです。ご指導くださった大学の先生方ならびに、ご協力くださった勤務校の皆様はじめ多くの方々に対し、心から感謝申し上げます。

M2ミドルリーダー養成コース 神 大 輔



研究テーマ
併設型小中学校において
連携を充実させるための
手立て - 児童生徒の実
態把握とその活用を通し
て -

小中連携教育は、義務教育の9年間における児童生徒のよりよい成長を目的としたものですが、それらを推進する主体は教職員にあります。連携充実のためには、まず、両校の教職員同士がその意義や目的を理解し、協力し合う必要があります。そこで、「両校教職員同士の一体感の醸成」と「両校教職員間における課題や取組の方向性の共有」の実現へ向けて研究を進めてきました。成果と課題を明らかにし、異校種間、保護者や地域社会、関係機関等との連携充実にも生かしていきたいと考えています。本研究を進めるにあたり、ご協力していただいた小中学校の先生方には心から御礼申し上げます。

M2ミドルリーダー養成コース 成 田 綾 子



研究テーマ
生徒の課題解決につな
がる教諭と養護教諭の情
報共有 - ニーズの共通
化につながる保健室から
の情報発信のあり方 -

この一年間、どうすれば、先生方に生徒の情報をうまく伝えることができるのか、生徒の課題を共有するためにはどういった情報交換が効果的なのかを考えながら、いくつかの方法を意図的に取り入れて先生方と情報交換を行ってきました。その中で感じたことや考えたことを報告します。自分自身、納得のいく答えは見つかっていませんが、これからも情報交換について追究していくつもりですので、たくさんのご意見をいただければありがたいです。



M2ミドルリーダー養成コース 成 田 幸 子



研究テーマ
つながりを生かした学級
集団づくり

多様性と複雑化が叫ばれる今、学校は様々な教育課題と直面しています。そこで、本研究では、学校だからこそ生かせる“つながり”に着目し、同僚性と専門性に分類しながら協働による学級集団づくりについて実践してきました。学校内外の“つながり”を生かすことで、学級担任の困り感が高い学級がどのように個から集団へと成長していったのか。実践研究の過程と成果と課題、そして目の前の子どもたちから教えられたこと、ミドルリーダーとしての気づきを報告します。

ひとりひとりがユニークで大切な存在。それは、児童にも教員にも言えること。児童同士、教師同士、児童と教師、みんながみんなとつながりあってともに成長していく場所。そんな素敵で魅力的な場所が学校なのだと、今、強く思います。

M2ミドルリーダー養成コース 三 上 豊 広



研究テーマ
居住地校交流の推進と負
担感軽減を目指した取組
について
- 実施計画作成と打ち合
わせ、実施記録の効率化
に着目して -

居住地校交流の推進と担当教員の負担感軽減等について、これまで取り組んできた研究の最終報告を行います。

新たに作成した「居住地校交流 実施計画・記録シート」の試用とその実施に係るアンケートの結果やその他の課題点に関する考察を発表します。卒業後、将来的に居住する地域においてより豊かに生活するための基盤づくりとして、とても意義のある居住地校交流が今後ますます発展していくことを期待しています。

〈編集・発行〉

弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻
(教職大学院) News Letter 第9号 2020.2.6発行
〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
Tel 0172-36-2111(代表)
メールアドレス k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp
HP 弘前大学教育学部 (教職大学院をクリック)
弘前大学教職大学院 入試フォローアップ部会